

# 国立国語研究所学術情報リポジトリ

## 相手を理解する：言葉の背景を見つめると… 解説書

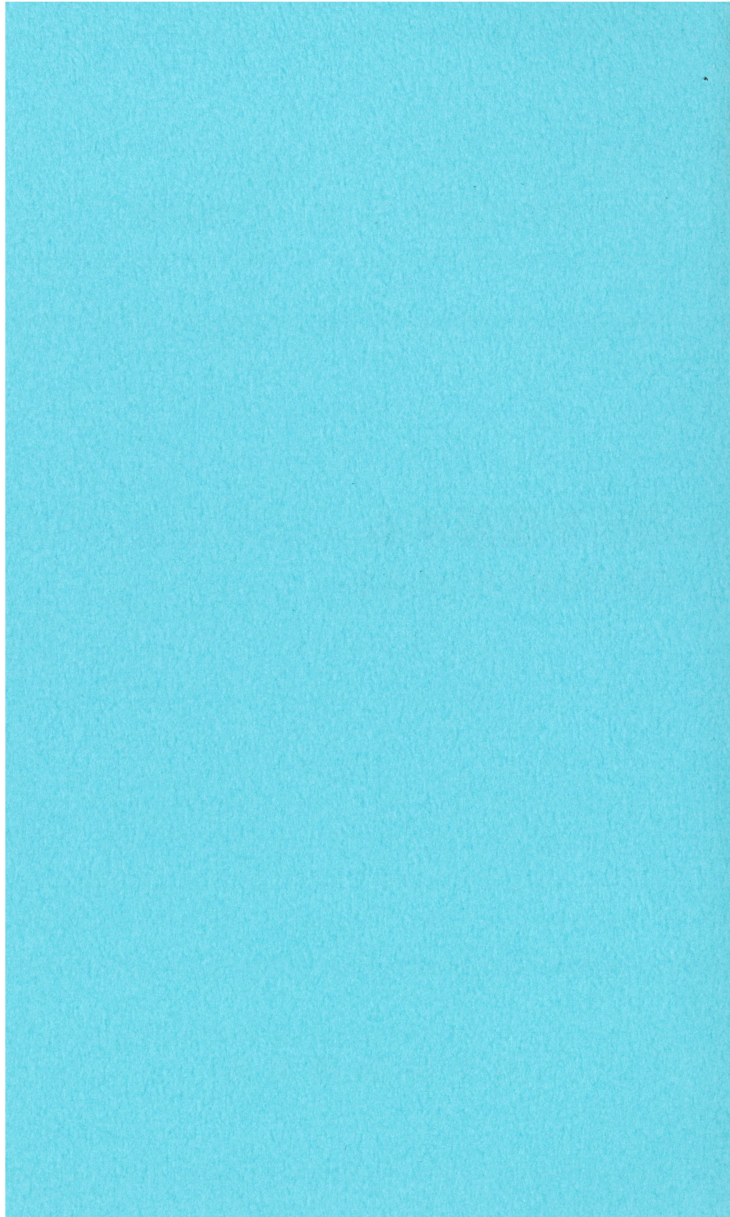
メタデータ	言語: jpn 出版者: 公開日: 2020-07-16 キーワード (Ja): キーワード (En): 作成者: メールアドレス: 所属:
URL	<a href="https://repository.ninjal.ac.jp/records/2875">https://repository.ninjal.ac.jp/records/2875</a>

国立国語研究所「ことばビデオ」シリーズ  
〈豊かな言語生活をめざして〉 1 解説書

## 相手を理解する

言葉の背景を見つめると…

国立国語研究所



## はじめに

国立国語研究所では、平成 13 年度から、「ことばビデオ」シリーズ〈豊かな言語生活をめざして〉を制作することになりました。これは、文化庁が昭和 55 年度から制作してきたビデオテープ・シリーズ「美しく豊かな言葉をめざして」を引継ぐものです。今後、このシリーズでは、国立国語研究所で行っている日本語や言語生活に関する調査研究の成果を生かしながら、音声や映像といった視聴覚素材の特徴を利用して、言葉に関する問題の提示や解説を行い、言葉をめぐる様々なことごとについて考えたり話し合ったりするきっかけを提供していきたいと考えています。

平成 13 年度は、「相手を理解する ―言葉の背景を見つめると…―」というタイトルで、言葉の使い方やものの考え方の違いから生じるコミュニケーション上のつまずきや、行き違いへの対処について描いています。この解説書は、ビデオを一層効果的に利用していただくために、制作意図を明らかにし、利用の際のポイントなどについて述べたものです。

このビデオ・シリーズが、国語科や「総合的な学習の時間」などの教材として、あるいは大学等のコミュニケーション関係の授業や各種社会教育の場などにおいて広く利用されることを期待いたします。

独立行政法人 国立国語研究所長

甲斐 睦朗



## 目次

<このビデオの目的> .....	1
<内容> .....	3
<ユニットごとのねらい> .....	3
<シナリオ> .....	7
<話し合いのために> .....	35
<参考文献> .....	36
<制作体制> .....	37



## <このビデオの目的>

### 言葉をめぐる戸惑いやつまずき

私たちは、毎日の生活の中で、いろいろな相手と、いろいろな場面で言葉によるコミュニケーションを行っています。言葉を用いることで、たくさんの情報や複雑な内容も伝えることができます。しかしその一方で、言葉をめぐって当惑したり、違和感を感じたり、時には誤解や摩擦といった行き違いが起こる場合もあります。

このビデオでは、そういったコミュニケーションにおける戸惑いやつまずきの例を具体的に取り上げました。そして、どのようなことからそれらが起こるのか、起きないようにするにはどんなことに気をつけたらよいのか、起きてしまったらどのように対応するとよいのか、を考えることを目的としています。

### 相手と自分との「違い」

コミュニケーションの問題は、多くの場合、相手との何らかの「違い」から生まれます。「違い」としては、まず用いる言葉が考えられます。日本語と外国語、というのは最たる例です。同じ日本語の中でも、方言が違えば伝達の上で誤解が起こるかもしれません。若者言葉や専門用語など、年代や特定の集団によっても言葉が違って、俗に言う「通じない」ということが起こるかもしれません。

次に、言葉を使うときのものの考え方が異なる、ということがあります。たとえば、同じ語に対しても、人によって印象や連想することがらにずれがあれば、それによってもものの言い方や受け取り方も違ってくるでしょう。また、何が相手に対する丁寧さや好意を表すことになるか、どのような場面でどのよう



なことを言うべきか、などの考え方も、コミュニケーションを左右する重要な要因です。

### よりよいコミュニケーションに向けて

このビデオでは、方言、丁寧な言葉の使い分け、外国人の目から見た日本語の分かりにくい部分や言語行動の仕方などを取り上げました。様々なことがらをめぐる各ユニットは、どれも「言葉によるコミュニケーションでの戸惑い」の例です。それらを見ていくと、2つのことに思いあたるかと思います。1つは、一見同じように言葉を使っているようでも、実はその背景には異なるものの考え方があるかもしれない、ということです。そして、もう1つは、表現の仕方が一見異なるように見えても、その底に流れる気持ちは同じ場合もある、ということです。

国や出身地域、性別や年代、そしてつきつめれば各々の個性があり、人は一人一人が違っているといえます。ですから、コミュニケーションが自分の思ったように運ばないときでも、相手は自分とは違う発想をしているのかもしれない、それはどのようなものだろう、と想像してみるのが大切です。それによって、相手の立場からものを見直してみたり、互いに協力してより円滑なコミュニケーションをつくっていく柔軟性も生まれてくるでしょう。自分を無理に相手に合わせるということではなく、異なる視点に立つことで、別の発想に気づいたり、自分自身のものの考え方やコミュニケーションの仕方を新たな目で再発見することもあるはずです。このビデオが、そうしたことについて考えたり話し合ったりしていただくきっかけになれば幸いです。

## <内容>

原田家は、会社員の父・俊夫と母・綾子、そして大学生の香織と高校生の博の4人家族です。彼らは、香織を通して韓国出身のパク・スンヒ、アメリカから来たメリー、中国から来た陳といった留学生たちと親しくなります。そして、スンヒたちから投げかけられる日本語についての疑問をきっかけに、日ごろは無意識に使っている日本語について、いろいろ考えるようになります。また、博や綾子も自分自身の生活での出来事から、方言や敬語を新しい観点から見始めるなど、言葉やコミュニケーションについての興味を深めていくのでした。

## <ユニットごとのねらい>

### ★導入

同じ虹を見ても、それを「幾つの色」と言うかは、自分の言語で色をどのように分類して名付けているかで異なります。また、日本語では子供などの血色のよい頬を指して「リンゴのほっぺ」と言いますが、「リンゴ」で「赤い色」を連想するのは万国共通でしょうか？ 私たちが漠然と「常識」のように思っていることも、言語や文化が異なるとそうではない場合もある、という例をこのユニットでは示しています。

### ★第1話 「すみません」のコミュニケーション

「おわびの言葉」とされる「すみません」ですが、実際には相手への呼び掛けや感謝など、様々な働きに使われています。留学生のスンヒの質問をきっかけに、原田家では、感謝の言葉としての「すみません」が話題になります。ここでは、自分の

受けた恩恵や利益に注目した「ありがとう」に対して、そのために相手が負ってくれた負担への配慮を「すみません」に込める、という考え方に目を向けています。

### ★第2話 いきいき方言

同じ日本語の中でも多様性があります。地域ごとの方言もその1つです。各地の方言は多様性に富んでいるため、異なる方言の間では話が通じないこともあります。言語の様々な機能のうちで、情報内容を伝達するという面に注目すれば、共通語は誰にでも分かるという意味で効率的です。しかし、方言でなければ言い表せない独特の意味合いや感覚もあります。共通語の便利さの一方で、方言ならではの良さ、味わい深さも大切にしていきたいものです。

### ★第3話 丁寧な言葉はどんなときに？

一般に、敬語は目上の人に対して使うものと思われがちです。しかし、よく知らない人に対しても敬語は使われます。特に昨今の傾向を見ると、敬語の使用には、相手と親しいか親しくないかということがより強く関わってきているように思われます。誰かと仲たがいをしたときなど、敬語を使うことによって相手へのよそよそしさを示すこともあります。ここでは、そうした幾つかの例をもとに、相手との心理的距離の点から敬語の使い分けについて考えています。

### ★第4話 ほめるのは難しい

同じ言語行動（言葉による相手への働き掛け）でも、文化や社会によって意味や現れ方が異なることがあります。ここではこの点について、「ほめる」を例に考えています。ほめられれば相手は快い気持ちになり、対人関係も円滑になるのが常です

が、例えば先生が学生に授業の仕方をほめられたときなど、ほめられた人が違和感や不快感を感じる場合が日本ではあるようです。一方、同じ場面でも問題にならない文化もあります。言葉の違いは比較的すぐそれと分かりますが、言葉による行動についての考え方の違いは、時には礼儀の有無や人格と結びつけて考えられるので、思わぬ誤解のないよう注意が必要です。

### ★第5話 「あいまいな言葉」の中に

あいまいな表現は、理解の上では厄介なときもあります。しかし、断りや批判などストレートに言うと相手との摩擦を起こしかねないような場合には、適度な和らげとして役立ちます。また、一見あいまいなようでも、人は様々な手段（声の調子、顔の表情、体の動き、など）によって意思を伝えていることもあります。コミュニケーションは言葉の形だけでなされるものではありません。いろいろな所にアンテナを向けて、相手の意図を的確にくみとることの重要性も、ここでは示しています。

### ★第6話 多様性を見つめて

言語や文化、出身地域、年代などの違う人との間では差異を意識しがちですが、表現の仕方が違ってても、基本的な気持ちの持ち方や相手に伝えたいと思っていることは同じだ、ということもあります。各自のやり方を無理に変えようとしなくても、互いが相手の考え方を少しでも理解しようとするのが大切です。異なる環境を体験したり異なる視点に立つことで自分自身もよりよく見えてくること、そしてひいてはそれが他者とのよりよいコミュニケーションづくりにつながることを、締めくくりとして再確認します。



## <シナリオ>

### 相手を理解する -言葉の背景を見つめると…-

#### 導入

画面	ナレーション
<p>虹が空に架かっている 青空の虹・全景</p>	<p><sup>にじ</sup>虹…美しいですね。 日本では普通、「虹は7色」といいます。</p>
<p>アメリカの6色の虹 デザイン画</p>	<p>ところが、英語では6つの色に分けて表現するそうです。 さらに、アフリカの言語の中には、3つとか2つに分けて表現するものもあるようです。</p>
<p>満月の中の動物模様 満月 ウサギの模様</p>	<p>また、日本の子供たちは満月の中に見える模様は、餅をつくウサギである…と聞いて育ちます。</p>
<p>カニの模様</p>	<p>ところが、そうではなくて、「あれはカニの形である」と言う国の人たちもいます。</p>
<p>線画 画用紙に描かれたリンゴの輪郭 リンゴの輪郭の中に赤い色が塗られていく リンゴの輪郭の中に緑色が塗られていく</p>	<p>リンゴです。 リンゴの色はと聞かれると、 <sup>わたし</sup>私たちは「赤いリンゴ」を思い浮かべるでしょう。 ところが、フランスでは、「緑色のリンゴ」を思い浮かべる人</p>

<p>絵画が積み重なる 児童画や絵画 デザインなど</p> <p>虹や月、リングの絵がオーバー ラップする</p>	<p>が多いようです。</p> <p>このように、生まれ育った言葉の習慣によって、ものの見方やとらえ方が異なることがあります。</p> <p>こうした言葉の習慣の違いは、異なる国や民族の間だけでなく、日本の中にもあります。</p> <p>時には、このことが原因となってコミュニケーションをはかる上で、様々な行き違いが起こります。</p> <p>どのような行き違いが、どうして起きるのか、起きないようにするためにはどうしたらよいのかを考えてみることにしましょう。</p>
---	--

## 第1話 「すみません」のコミュニケーション

### 1-1 公園

バク・スンヒが歩いてくる。

字幕 (バク・スンヒ)

### 1-2 ケーキ店の表と内部

ケーキ店外景。

女性客の梅野と娘の美保がケーキを選び終え、店員に、

梅野 「すみません。こちらのケーキを下さい」

店員 「お幾つにしましょう」

梅野 「そうねえ…4つでいいわ」

店員 「4つですね」

梅野 「すみません」

店員、箱に詰め始める。

その間に、美保が梅野のそでを引き、小声で聞く。

美保 「ねえ、ママ、なぜ謝ったの？」

梅野 「え？…謝ってなんかいませんよ。」

美保 「だって、今、『すみません』で言ったでしょう？」

近くでケーキを選んでいたバク・スンヒが母子のやりとりに興味を持つ。

梅野 「(一瞬、詰まってから) お願いするときにはそう言うの」

美保 「ふーん…」

店員、包み終わった品物を差し出しながら、

店員 「お待たせしました。1, 260円になります」

梅野、千円札を2枚、差し出す。

店員、レジで精算し、小銭を出し、

店員 「すみません。細かくなりますが、740円のお返しになります」

お釣りとレシートを取って、

梅野 「すみません」

品物を受け取り、立ち去りながら、

美保 「ねえ、ママ、お店の人も『すみません』って言ったよ。

美保がお買物遊びをするとき、『ありがとうございます。お釣りです』って言うよ」

梅野、立ち止まり、考えてから声を低め、

梅野 「お釣りが細かかったからじゃないの？」

美保 「(小首をかしげて) ふーん」



梅野 「さ、行こう」

店を出ていく梅野と美保に、

店員 「ありがとうございます」

スンヒ、笑顔で見送った後、店員の方に近寄りながら、

スンヒ 「ちょっと、お願いします」

店員 「いらっしゃいませ」

と、対応する。

### 1-3 原田家の外景

#### 1-4 同・リビング

原田家の面々が、パク・スンヒを迎えている。

香織 「紹介します。韓国からの留学生で、パク・スンヒさん」

字幕 (原田香織)

スンヒ 「はじめまして」

俊夫 「香織の父です」

字幕 (原田俊夫)

香織 「俊夫といます」

綾子 「母の綾子です」

字幕 (原田綾子)

博、照れくさそうに頭を下げる。

字幕 (原田博)

香織 「弟で、博といます。高校生です」

スンヒ 「よろしくお願いします」

博 「よろしくお願いします」

俊夫 「さあ、どうぞ。お掛けください」

一同、ソファーに座る。

香織 「(手土産を示し) これ、スンヒさんから」

綾子 「まあ、すみませんねえ、気を遣わないでください」

俊夫 「そうですとも。いつも香織がすみません」

スンヒ 「はあ?…いえ…」

(スンヒの心の声)『お母さんの“すみません”は分かったけど、お父さんのは、同じ意味なのかなあ…?』

綾子、考えているスンヒを促すように、

綾子 「あの、お飲み物はコーヒーにしましょうか? それとも…」

スンヒ 「あっ、コーヒーを頂きます」

綾子 「はい。ゆっくりしてってくださいね」

準備に立っていく。

俊夫 「バクさんは日本語がお上手ですねえ。どのくらい勉強されたんですか？」

スンヒ 「私の国の大学で日本語を専攻して、こちらに留学してから1年近くなります」

俊夫 「へえ!それなら日本の生活にも随分慣れたでしょう」

スンヒ 「いえいえ!私の国で勉強した日本語と、みなさんが実際に使っている言葉と、違うところがあって戸惑いました」

俊夫 「ほう、どんなところですか？」

スンヒ 「例えば、先ほどの「すみません」です。私はおわびの意味で使うことが多いと思っていたんですが、日本に来たら感謝の意味でもよく使いますね？」

俊夫 「いやあ、私は香織がいつもお世話になっていると思ったもんですから、感謝の気持ちで『すみません』と言ったんです」

香織 「それなら『いつも、香織をありがとう』の方が分かり

やすいのよ」

俊夫 「そうか。なるほど」

綾子がコーヒーとケーキを運んでくる。

綾子 「はい、お待たせしました」

スンヒ 「ありがとう…あっ、こういうときは『すみません』を使った方がいいのですか？」

一同、一瞬、考えてしまう。

スンヒ 「うーん。分からなくなりました」

俊夫 「いや、分かってきたような気がします。こういうことでしょうか。例えば、コーヒーを入れてくれるのは相手の負担になる。その負担に対して、申し訳ないと思えば『すみません』という言葉になる…」

スンヒ、聞いている。

俊夫 「一方、コーヒーを入れてもらったことに対する感謝の気持ちを表すなら『ありがとう』という言葉になるんじゃないか？」

香織 「すごーい！お父さん」

スンヒ 「(うなずき) …さすが、一家の大黒柱」

俊夫 「はい！ 会社では営業部の責任をもたされてますし、家庭では御覧の通りで、父親っていうのは、なかなか、大変なんです」

綾子 「はい、ケーキいただきますよ」

俊夫 「いただきます」

一同、談笑しながらケーキを食べ始める。

画面	ナレーション
「すみません」の例を3面マル	いかがでしょうか？ ここでは、「すみません」とい

<p>チで見せる おわび 感謝 呼び掛け</p>	<p>う言葉が、おわびや感謝や呼び掛けなどでも使われていましたね。 みなさんも「すみません」を使いますね。 どんなときに使っているでしょうか？</p>
--------------------------------------	---

## 第2話 いきいき方言

### 2-1 原田家 遅い夕刻

電話口。スーツ姿の俊夫がコートを抱え電話で話をしている。

俊夫 「…はい、その日は休みなのですが、私は用事がありまして、綾子と博が行きますからよろしくお願いします。はあ？…『ヤノアサッテ』？…『シアサッテ』じゃないんですか？」

カレンダーの方を見る。

### 2-2 川島家の電話口

綾子の親せき、源造が電話に出ている。

源造 「いや、『ヤノアサッテ』だと聞いてます。間違えないでくださいよ」

### 2-3 原田家の電話口

俊夫 「ちょっと待ってくださいよ。(カレンダーを確認しながら、指折り数え) あした、あさっての翌日が『シアサッテ』だから…」

#### 2-4 川島家の電話口

源造 「いや、あさっての次の日は『ヤノアサッテ』です」

#### 2-5 原田家の電話口

俊夫 「ちょっ、ちょっと、航空券を予約した日を調べますんで…。(手帳を見て) 9日です」

#### 2-6 川島家の電話口

源造 「9日なら『ヤノアサッテ』でしょう。しっかりしてくださいよ。ハハハハハ…。では、お待ちしております」

#### 2-7 原田家の電話口

俊夫 「はあ、いや、失礼しました。よろしくお願いします」  
頭を下げ、受話器を戻したところに、綾子が帰ってくる。

綾子 「あら、お帰りなさい。何かあったの？」

俊夫 「うん、北海道の源造おじさんからだったんだけどね、来るのは『ヤノアサッテ』かって。私のふるさとでは『シアサッテ』って言うだろう？ 一瞬、日にちがわからなくなってさ…」

綾子 「ああ、地域によっていろんな言い方があるみたい。前にも間違えたことなかった？」

俊夫 「そうだったなあ。あのときも同じ日本なのに言葉って違うんだと思ったんだ… (自分自身にも言い聞かせている)」

コートを綾子に手渡し、居間の方へ行く背後に、

綾子 「9日よ。間違いはないんでしょうね」

俊夫 「(声が返ってくる) ああ、大丈夫」

## 2-8 北海道の雪景色

飛行機の窓から見た雪景色

## 2-9 札幌市・郊外

雪が積もっている上り坂を荷物を抱えた綾子と博が歩いている。  
息を切らしている2人。

## 2-10 川島家 その外景

玄関フードのある家。

玄関口、綾子と博、寒さに身震いする。

綾子、玄関フードの戸を閉め、玄関口のチャイムを押す。

ドアが開いて、源造が顔を出す。

源造 「や、いや、いや、いや、いらっしやい。さあさ、入れ、  
入れ！外は、シバレル。いや、いや、いや、いや」

玄関内に入って、

綾子 「なつかしい！久しぶりにシバレルを聞いて」

源造 「そうか。やあ、博君か。おっきくなったなあ！シバレ  
ルだろう？ドア閉めれ。さっ、上がれ上がれ」

綾子 「では、遠慮なく。(博を促す)」

源造 「ふるさとだ。遠慮はいらん。さ、どうぞ、どうぞ」

居間に入って、

源造 「さ、座って、座って」

ソファーに腰掛ける。

源造 「コワカッタベえ！」

綾子 「はあー、コワカッター」

博 「……？」

源造 「博君もコワカッタベえ？」

博 「いいえ、僕は…」

源造 「若いもんな。ハッハッハッ… (博に) どうだ、北海道の初印象は？」

博 「はい。家の中は暖かいけど、外は寒いというか、何と言うのかなあ…」

源造 「シバレルだ！シバレルでないと、この凍る、こわばるというか痛みを感じずる寒さは言い表せないんだあ。なあ、綾子さん！」

綾子 「(深くうなずき) うーん。さっきも、『コワカッタベえ』と聞いて、やっとふるさとに帰ってきた気持ちだわあ。『大変な』とか『つらい』とか、西の方で言う『しんどい』では、やっぱり、感じが出ないんでないかい」

ふるさとの言葉を楽しんでいる母親を笑顔で見る博。

画面	博のモノローグ
<p>外景 なべ 鍋を楽しむ一同</p> <p>外では雪が舞う</p> <p>布団にもぐっている博… 綾子用の布団も敷いてある 目を開けている博のアップ</p> <p>時計台と吹雪 ポプラと吹雪 凍った川 ダイヤモンドダスト (字幕)</p> <p>博のアップ</p>	<p>ふるさとの言葉を使うお母さんは、ふだん家の中で話しているときは全然違う。</p> <p>僕には意味がよく分からないところもあるけれど、シバレルところなのに心は暖まる感じがした。</p> <p>今日だって寒いと思ったけど、ほんとにシバレルときはこんなもんじゃないらしい。</p> <p>突然襲ってくる地吹雪。激しい風。川も凍る。ものすごく寒いときには、ダイヤモンドダストっていう現象が起こるそうさ。</p> <p>東京の寒さと違って、「シバレル」って言わないと、きっと感</p>

<p>居間では綾子を交えて、源造、その家族の談笑</p>	<p>じが出ないんだろうな。 北海道に来て、方言でないとぴったりと言い表せないものがあることが分かった。 お母さんは、まだまだ話し足りないようだ。</p>
------------------------------	---

### 第3話 丁寧な言葉はどんなときに？

#### 3-1 大学校舎の情景

#### 3-2 大学構内

香織、帰りかけていると携帯電話が鳴る。

香織 「(取り出して) はい…ああ、なーんだ、お母さん…何かあったの？…えっ、学校のすぐそば？…講義は終わったよ…買物に？」

#### 3-3 公衆電話

綾子 「正門のところで会おうか？…みんなに見られる？…いいじゃない、あたしとなんだから」

#### 3-4 構内

香織 「中学生じゃないんだから、親が大学に来るなんて、みっともないよ。入学式や卒業式ならいざしらず…」

#### 3-5 公衆電話

綾子 「ああ、そうだ！ 入学式の時、記念写真を撮ったでしょう。ほら、あの、石のモニュメントがあるでしょう。あそ



こなら覚えてるからすぐに行くわ]

一方的に通話を切り、出ていく。

### 3-6 構内

香織、携帯をしまい、渋々、階段を降りていく。

### 3-7 構内 待ち合わせの場所

香織、歩いてくる。

声 「あら！原田さん！香織さんじゃない！」

振り向くと、学食の加藤幸江が作業着で三角巾さんを外しながら出てくる。

香織 「あら！加藤さん！今日からだったの？」

そこへ、綾子が来て、二人に気づき、近づく。

香織 「もう、大丈夫なの？風邪、引いたんだって？」

木のそばで二人の会話が聞こえてしまう綾子…ハラハラしながら、  
(綾子の心の声)『年上の人に向かって、あんな言葉遣いで…』

加藤 「ええ、熱が引かなくてねえ」

香織 「1週間ぐらい休んでたでしょう。毎日、学食のぞいたけど、見かけなかったから心配してたんだよ」

加藤 「ありがとう。こんなに寝込んだのしばらくぶりよ」

香織 「今日も休んでると思って、行かなかったのよ」

加藤 「香織さん、来てくれるかなあと思って、気を付けてたんだけど」

香織 「ごめん！行けばよかったなあ。でも、元気になってよかった！」

加藤 「心配かけちゃったねえ」

そこへ、学生の小川京子の声がある。

小川 「あら！（香織に近づき）原田さん！」

香織と加藤、気付く。

加藤 「(小さめな声で) じゃあ、またね」

香織 「うん、あしたは行くから」

加藤、小川京子たちに頭を軽く下げて立ち去っていく。

小川 「ごめんなさい、お話し中に」

香織 「あっ、いいえ。」

小川 「たしか、杉山先生の講義に出てらしたでしょ？」

香織 「はい、出ていますけど」

小川 「実は、きのうの講義、休んじったんですけど、レポートの締切りについて何か話がありました？」

香織 「いいえ、きのうは別に具体的な締切りの日はおっしゃってませんでしたけど」

小川 「あ、そうですか」

2人の会話を聞いている綾子。

香織 「でも、今週中に掲示板で知らせるっておっしゃってましたよ」

小川 「掲示板ですね。どうもありがとう」

香織 「いいえ。どういたしまして」

小川 「じゃ」

軽く会釈して立ち去る。

会釈を返し、見送る香織の肩を後ろから綾子がたたく。

振り返る香織…「ああ」といった感じではほ笑む。

### 3-8 近くの道

並んで歩く綾子と香織。

綾子 「年上の人なのに、いいの？ あんな言葉遣いで」

香織 「いいのよ、私たち仲良しなんだから。毎日、学食で会ってるんだし」

綾子 「同じ年ごろの学生さんには、丁寧な言葉を使ってたじゃない？」

香織 「だって、あの人とは同じ講義とってるだけで、あんまり親しくないし」

綾子 「……」

香織 「で、買物って何？」

綾子 「今日、お父さんの誕生日だから」

香織 「そのプレゼント？ 珍しい！」

綾子 「このごろ、してないし、たまにはね」

香織 「お父さん、知ってるの？」

綾子 「ううん、内緒よ。驚かそうと思って」

### 3-9 原田家の夜景

#### 3-10 原田家 リビング

テーブル上にワイングラス、ケーキ、ロウソクがセットされてあって、プレゼントの包みが置いてある。

やや御機嫌斜めの綾子、台所から出てきて時計を見上げる。

時計の針が10時半近くを指す。

#### 3-11 原田家 香織の部屋

香織、ファッション雑誌のページをめくるが、リビングの方が気になって落ち着かない。

(玄関ドアが開く音) 気付く香織。

### 3-12 原田家 玄関

俊夫が入ってくる。

俊夫 「ただいま」

コートを外し、靴を脱いでいると綾子が出てくる。

綾子 「今、何時だと思ってるの？」

俊夫、いつもと違う言葉遣いに、

俊夫 「ええ？」

改めて、妻の表情を見て、様子がおかしいのに気がき、

俊夫 「すまん、すまん、仕事が終わらなかったんだ」

コートを手渡そうとするが、

綾子 「朝は、普通に帰れるっておっしゃったじゃないですか」

俊夫 「仕事が長引いたんだ」

コートを手にしたまま、すり抜けていく。

綾子、追いながら、

綾子 「もう10時をとくにまわっております」

俊夫 「自分だけ先に帰るわけにはいかないだろ」

綾子 「遅くなるならなるで、どうして電話してくださらなかったんですか？」

### 3-13 原田家 リビング

俊夫、入ってきて、テーブル上の誕生祝いに気付く。

俊夫 「……」

返す言葉がなく、セットを見つめる俊夫…。

俊夫 「(綾子に) …ごめん」

入ってきた綾子、俊夫の手のコートを静かに取る。

香織と博が「お帰り！」と、入ってくる。

香織 「誕生日ぐらい、普通に帰っておいでよ！」

博 「おなかすいたよ」

俊夫 「何だ、まだだったのか？」

博 「いや、ちょっと、つまみ食いたけどね」

俊夫、ほっとした笑顔になる。

香織 「お母さんも、もう許してあげなよ。そんなよそよそしいしゃべり方はもうやめて」

俊夫 「こんなに遅くまで待たせてしまって。悪かった」

笑顔に戻る綾子。

画面	綾子のモノローグ
<p>テーブル上のキャンドルに火がともっている。 ハッピーバースデーの歌を合唱する子供と綾子 神妙な俊夫 ケーキのロウソクを吹き消す俊夫 そして、プレゼントを差し出す綾子 恭しく頂く俊夫 カードを開く 乾杯が行われる</p> <p>綾子の表情</p>	<p>今日みたいなとき、お父さんにもよそよそしい言葉を使ってしまう。</p> <p>子供たちをしかるときも、言葉は丁寧になるときがある。</p> <p>そういえば今日、香織は、年上の人でも親しければ、丁寧な言葉はいらなと言っていた。その一方で、同じ年ごろでも、余り親しくない学生さんには、丁寧な言葉を使っていた。</p> <p>相手にどんな気持ちを持っているかで言葉遣いも変わるのね。</p>

## 第4話 ほめるのは難しい

### 4-1 市民文化会館の外景

### 4-2 書道教室

廊下。展示してある習字作品。

一般の受講者に混じって留学生たちも熱心に書道に取り組んでいる。

見学している香織。

(香織のモノローグ)『スンヒが書道を習っているというので、見学させてもらった』

陳が書いている。

字幕 (陳 呉建)

(香織のモノローグ)『陳さん。中国からの留学生で、まだ余り日本語には慣れていないようだ』

メリーも、毛筆を振るっている。

字幕 (メリー・フォスター)

(香織のモノローグ)『アメリカから来ているメリーさん。日本語はまあまあかな…』

習字の手元をアップで積み重ねていく。

堂本 「書けましたか？ では、書き終わった人から私のところへ持ってきてください」

メリー、堂本のところに提出に行く。

メリー 「お願いします」

堂本 「はい」

堂本、メリーが提出した書に朱を入れながら、

堂本 「ここは、筆先をしっかりと止めて…こう跳ねる。お手本

と比べてください。分かりますか？」

メリー 「はい」

堂本 「でも、前よりずっと良くなっています」

メリー 「ありがとうございます」

堂本 「頑張ってください」

#### 4-3 廊下からロビーへ

留学生たちと香織、歩いてくる。

陳、落ち込んでいる。ソファへ座る4人。

香織 「陳さん、どうしたの？」

陳 「私、わかりません。教えてください。授業のときです」と、思い起こす。

#### 4-4 回想の書道教室

最後に、陳が見てもらい、一礼して戻りかけると、

堂本 「では、本日はこれで終わります」

その一言を聞いた陳、先生のところへ歩み寄り、

陳 「先生、今日の授業はよくできました」

堂本、あきれた表情になる。画面ストップ。

#### 4-5 もとのロビー

陳 「先生、返事をしてくれませんでした。なぜですか？」

香織 「日本では、先生に対して陳さんのようなことを言う生徒、いないから驚いたのよ」

陳 「私、感謝の気持ちで言いました」

香織 「うーん、(少し考え) それだったら、言葉の選び方が問題だったのかなあ。感謝の気持ちを伝えるんだったら、『あり

がとうございました』と言えば…」

メリー「そうね。でも、日本では先生をほめるのは失礼なんでしょうか？」

スンヒ「でも、私、留学したてのころ、お世話になった先生をほめたことがあるんですけど…」

#### 4-6 回想 大学の花田先生の研究室

書棚に囲まれて、机のところに花田が座り、スンヒのレポートを読んでいる。

花田 「(レポートを返しながら) 大分良くなりましたね。結論のところをもう少し詳しく述べる工夫をしてごらんなさい」

スンヒ 「はい、分かりました。ありがとうございます」

立ち上がりながら、卓上の写真を見て、

スンヒ 「御家族の写真ですね」

花田 「研究室は無味乾燥になりがちですからねえ」

スンヒ 「息子さんは、もう、高校生ですか？ 御聡明<sup>そうめい</sup>そうですね」

花田 「ありがとう。でも、スポーツに熱中してしましてね。いろいろな大会に出てはトロフィーをとってくるんですけど、進学の勉強のことを考えると心配なんです」

2人の話は続く。

スンヒ 「いつから、サッカー始めたんですか？」

花田 「中学のときにお友達に誘われたんですって。もう夢中よ！」

うれしそうに話し続ける花田。



#### 4-7 もとのロビー

スンヒ 「…私がほめたのに、先生、嫌な顔をしなかった」

香織 「それは子供さんをほめたのであって、例えば、スンヒ  
がその先生の授業をほめたとしたら、嫌な顔したかもよ」

スンヒ 「そうなのかなあ」

香織 「そうよ。先生は、授業についてはきちんとできて当然  
と思ってる。それなのに生徒から面と向かってほめられたら、  
違和感を覚えてしまう」

陳 「難しい」

香織 「先生も、陳さんの気持ちは分かっていると思うのね」

スンヒ 「私たちも、先生に『今日は良い授業でした』と言うこ  
とはあります。先生も喜んでくれます」

香織 「そうなの？」

メリー 「アメリカでもそうですよ。先生をほめるの、いいこと  
です。日本とは違うんですね」

香織 「『ほめる』ということだけでも、いろいろな考え方があ  
るのねえ」

陳 「今日は、いい勉強をしました。『ありがとうございます』  
ということですね。(みんなに明るく) サンキュー！」

一同 「どういたしまして！」

画面	香織のモノローグ
机に向かってパソコンを打つ香織	国によっては、先生をほめるのはいいことらしい。日本はどうだろうか？
その真剣なまなざし	授業は駄目だけど、先生の手料理やネクタイだったらほめてもよさそうだ。
机の上の異文化に関する書籍など	「ほめる」ってということ1つ

打ち続ける香織

でも、国や文化で違いがあるってことよね。難しいけど、面白い。

## 第5話 「あいまいな言葉」の中に

### 5-1 日本の中のコリアンタウン 夜の情景

### 5-2 同レストラン内

留学生たちに囲まれている原田家の人々。

韓国料理が出され、食事が始まっている。

俊夫 「うーん、おいしいです。パクさんをはじめ、皆さんから御招待を受けるなんて」

綾子 「ほんと、ありがとうございます」

スンヒ 「いいえ、私の方こそごちそうになっています。(留学生たちを見て) 香織さんだけじゃなく、御家族の皆さんにも日本のことを教わっています」

俊夫 「いえいえ！ 教えるなんて、そんな」

スンヒ 「たくさんありますから、どんどん召し上がってください！」

しばらく時間が経過して。

陳 「私には、日本語があいまいに聞こえることがあって、まだ、難しい」

香織 「陳さんには、日本語のいろいろな言葉遣いが、あいまいに感じられるのね」

陳 「はい。慣れるまで、まだまだかかりそうです」

俊夫 「そうかもしれないなあ。謙遜して言ったり、意味を含ませて言いますからねえ」

綾子 「うーん、そこがまた、日本語の奥深いところで、良さとも言われていますよねえ」

スンヒ 「私も、今はその良さが少し分かってきましたが、慣れないうちは、やはり、あいまいに感じられました」

俊夫 「ほおー、例えば？」

スンヒ 「『ちょっと』という言葉がよく使われますよね」

俊夫 「はい。私なども、会社で、『ちょっと、それ取ってくれない』とか『ちょっと、頼みたいんだが』なんて、呼び掛けで使ってますがねえ」

綾子 「もともとは、『少しの間』とか『ほんの少しの量』といった意味なんですよ」

スンヒ 「その意味は分かるんですが、『それはちょっと問題です』と言われて、『少しだけ』問題があるのかな、と置いていたら、実は大変な問題だったりして…」

俊夫 「そうですね。『それは問題です』と言うと、相手を責めてるような感じがするんで、つい『ちょっと』を入れてしまうんじゃないかなあ」

香織 「言葉遣いが柔らかくなるのよ」

メリー 「私が分からなかったのは、『いいです』の使い方です。意味は、『良い』とか『すばらしい』ですね？」

綾子 「ええ。その通りです」

メリー 「それなら、『良い』とか『すばらしい』という意味の『いいです』は、受け入れている、という意味ですよ。ただ、『いいです』と断られたことが何回もあります。頭の中がこんなです（混乱のジェスチャー）」

一同、笑う。

綾子 「メリーさんが分からないと言うのは、断りの方の『い

いです』のことですよね」

メリー 「はい」

綾子 「それは、『なくていい』とか『しなくていい』とかいうことなんじゃないかしら」

香織 「あ、そうよ。『必要がない』ということで、断りにも『いいです』が使われているわけね」

綾子 「私はそう考えるのですが、どうでしょうか？」

メリー 「お母さんと香織さんの説明、よく分かりました。でも、『いいです』と言われたときに、それがどっちの意味の『いいです』なのかが、まだ、よく分からないんです」

俊夫 「相手の表情とか声の調子とかなどで分かると思いますよ。『いいです』にしても、例えば、『いいですよ』（受入れの発音をしてみせる）と『いいですよ』（断りの発音をしてみせる）では、声や表情が違うでしょう？」

メリー 「ちょっと待ってください。（試してみる）『いいですよ』（受入れの発音）、『いいですよ』（断りの発音）…『いいですよ』が受入れで、『いいですよ』が断りですか？」

俊夫 「そうそう！」

陳 「声の調子に気を付ければ、違いが分かりますね」

博 「なるほどね。こんな風に自分の言葉を見直してみるのも面白いね」

スンヒ 「私も日本に来て、改めて自分の国の言葉について考え直すことができました。帰ってからも役に立ちそうです」

綾子 「えっ？ もう帰っちゃうんですか？」

スンヒ 「はい。早いもので、もう一年たちました」

寂しそうなスンヒの表情。

原田家の面々、惜別の思いで言葉が出ない。

画面	スンヒのモノローグ
<p>笑顔の会話</p> <p>スンヒ、元気に振る舞う 陳さんも楽しく話す その身振り手振り…</p> <p>メリーさんの話しながらの大きなジェスチャー</p> <p>原田家の人々も明るい表情を取り戻している 俊夫も綾子も… 香織や博も…</p> <p>再び、スンヒの明るい表情をとらえて…</p>	<p>分かりにくいと思っていた日本語の言葉遣いについていろいろなことが分かった。</p> <p>1つは、あいまいな言葉遣いの中には言葉を柔らかく言うという相手への気遣いが含まれているということ。</p> <p>もう1つは、文字に書くと同じでも、言い方によって意味が全然違ってくる場合がある。だから、相手の言いたいことをきちんとくみとるためには、声の調子や表情などにも気を配る必要があるということ。</p> <p>日本語ってあいまいな言葉だと思っていたけれど、こう考えてみると、韓国語やほかの言葉にも同じようなことはあるんだと思う。</p>

## 第6話 多様性を見つめて

### 6-1 原田家・外景

### 6-2 同・リビング

原田家の面々がテーブル上にごちそうを並べる。

中央に、スンヒが、かしこまっている。

そのスンヒを中に原田家の人々が囲んでいる。

スンヒ「私のために、ありがとうございます」

俊夫「まあ、内々の送別会ということで、家族みんなの感謝

の気持ちです」

スンヒ 「本当に、ありがとうございます」

俊夫 「では、パク・スンヒさんの健康とますますの御活躍を  
祈って、乾杯！」

一同、乾杯をし合う。

スンヒ、一礼を返す。

俊夫 「いやあ、先日はスンヒさんたちに招いていただいて、  
楽しい一時を過ごすことができました」

綾子 「ほんと。ありがとうございます。さあ、遠慮なさら  
ずに召し上がってください。何にもございませんが」

スンヒ 「?!……」

豪華な料理を見ながら、もう理解している表情。

香織、くすくす笑い出す。

綾子 「何?…変なこと言いました?」

香織 「相変わらずねえ、お母さん。スンヒは戸惑うどころか、  
もう分かっている」

スンヒ、「いえいえ…」といった小さな仕草。

綾子 「(気付いて) ああ、口癖というか、習慣ねえ。つい出て  
しまうのね。『粗末なものですが』とか」

博 「ほくらは冗談混じりで『粗末なものなんかお客様に出す  
な!』ってよく言います」

俊夫 「私たちは謙遜して言ってるんですが、やはり、変な感  
じがしますか?」

スンヒ 「はい。慣れてはきましたけど、ちょっと…」

俊夫 「ハハハ。『ちょっと』が出ましたね。(冗談めかして)『少  
しだけ』の意味ですか?」

スンヒ 「恐れ入ります」

綾子 「文化の違い、っていうんでしょうか、私もお招きを受けたときには、少々戸惑いました。あの食事のとき、スンヒさんにしても陳さんにしても『これはおいしいですよ』、『たくさんありますからどうぞ』って、積極的に…なんて言うんですか？」

香織 「アピールする？」

綾子 「そうそう。積極的に主張なさるじゃない。それに比べると、私たちは料理は十分あるのに『何もございませんが』というように控え目に表現してしまう」

スンヒ 「そのことは分かってるつもりなんですけど、やはり、立派な料理が目の前にあるもので… (料理をつまむ)」

綾子 「そうなんですか」

スンヒ、料理を味わって、

スンヒ 「とてもおいしいです！」

綾子 「ま、お口に合います？ 下手な手料理なんですけど」

一同の箸<sup>はし</sup>が止まり、綾子に視線が集まる。

綾子、気付いて、

綾子 「あら、やだ、また言っちゃった！」

笑いが起きる。

俊夫 「言葉の習慣って急には変えられないようですね」

綾子 「まだまだ、学習が足りないのね」

スンヒ 「いえ。それが文化の違いというものではないですか？  
習慣を無理に変える必要なんかないと私は思います」

綾子 「そうですねえ！ 表し方は違ってても、食事をしながら楽しい一時を過ごしたいという気持ちは同じですものね」

スンヒ 「そうなんです。私も日本に来て、韓国とは違うことをいろいろと経験して、そのことが改めて分かりました」

博 「僕は北海道に行ったとき、同じ国の中でも違う言葉遣い  
があって、その土地の言葉でないと表しきれないことがある  
んだなあと感じただけど…」

綾子、うなずきながら聞いている。

博 「それだって、北海道で、ふだんの生活とは違うことをた  
くさん体験したから、そう感じたんだと思うな」

スンヒ「賛成です。ですから私も、外国に来てよかったと思  
います」

香織 「そこで、どう？これ…ジャーン！」

隠し持っていた旅行案内のパンフレットを取り出す。

一同、パンフレットをのぞき込む。

博 「韓国か！」

香織 「スンヒも帰国することだし、チャンスでしょう！」

スンヒ「どうぞ、来てください！歓迎します！」

香織、パンフレットを俊夫に渡す。

一同の視線が、今度は俊夫に集中する。

香織 「せっかく、スンヒと知り合いになったんだもの！」

博 「ぼくも行ってみたいなあ！」

香織 「お母さんもどう？」

綾子 「私も？」

博 「いっそのこと、みんな一緒に行こうよ。お父さんも！」

俊夫 「えっ？」

香織 「お父さんも、自分の国の言葉を外国から見直してみな  
ければ！」

博 「そうだよ。韓国の次は、陳さんの中国、そして、メリー  
さんのアメリカ」

俊夫 「待て、待て。簡単に言うなよ。そのなあ、1人や2人



ならともかく、先立つものだとか、…仕事もあるし、いろいろとな」

香織 「また、お父さん、あいまいな言葉で逃げようとしてない？」

俊夫 「ん？…いやあ、まいったなあ」

頭をかきながら、笑顔に変わる。

家中に明るい笑いの渦が広がる。

画面	ナレーション
原田家からズームバック 住宅街の遠景	いかがでしたでしょうか。 同じことに対しても、自分とは違う見方をする人がいるかもしれません。 ですから、異なる立場から、物事を見てみようとするのも大切です。 このことは、自分の考え方や行動を見直してみることであります。
広い街の情景	相手の考え方を理解すると同時に、自分の考え方を改めて見つめ直すこと…ここから、よりよいコミュニケーションが始まります。

## ＜話し合いのために＞

☆相手から「ありがとう」と言われると予測（期待）していたのに、「すみません」と言われて違和感を感じた経験はありませんか。また、その逆の経験はどうでしょうか。

☆お礼で「ありがとう」の代わりに「すみません」が使えないのは、どんな場面（どんなことに対して）でしょうか？

☆知っている方言の言葉で、共通語では言い表せないニュアンスをもっているものを考えてみましょう。共通語の似た意味の言葉では、どのような部分がうまく言い表せないかを説明してみましょう。

☆「親しみを込めて話すときなら、学校で生徒が先生に友達のように話してもかまわない」という考え方は、若い年代の人を中心に増えているようです。この考え方についてどう思うか、話し合ってみましょう。

☆「敬語を使うことは、目上の人への礼儀を保つ上で大切だ」という側、「敬語は煩雑だし、相手を遠ざけるような感じがするので必要ない」という側に分かれて、ディベートをしてみましょう。

☆あなたが市民講座でパソコンの講習を受けたとします。先生は年配の男性です。家で一人でやっていたときにはどうしてもうまくできなかった操作が、先生の上手な説明でとてもよく分かりました。うれしくなって、クラスの後で先生に何か一言言おうと思います。そんなとき、何と言うでしょうか。

☆「いいですよ」を、次のような様々な言い方で言ってみまし

よう。声の調子，表情，身振りなどに工夫してみてください。

a. 依頼を引き受ける：喜んで／しぶしぶ／戸惑いながら

b. 申し出を断る：言下に／遠慮して

また，人の言ったのを聞いて，どんな気持ちで言っているのかを考えましょう。

☆これまでに，外国でも，日本国内でも，自分の生まれ育ったものとは異なる環境に入った経験を思い出し，そのときにどんなことが新鮮に思えたか，どんなことで困ったか，それらを通してどんなことを考えたか，などを話し合ってみましょう。

☆周囲に外国から来て日本に住んでいる人はいますか。その人は，日本の生活でどのようなことに戸惑ったり，疑問をもったりしていそうでしょうか。その戸惑いや疑問に対して，あなたならどのように説明をしてあげるでしょうか。

### <参考文献>

H.A.グリースン著，竹林滋・横山一郎共訳（1970）『記述言語学』大修館書店

（H.A. Gleason, Jr. (1955) An Introduction to Descriptive Linguistics. Holt, Rinehart and Winston, Inc.）

国立国語研究所（2002）『新「ことば」シリーズ 15「日本語を外から眺める」』財務省印刷局

佐藤亮一 監修（1991）『方言の読本』小学館

鈴木孝夫（1990）『日本語と外国語』岩波新書

徳川宗賢（1979）『日本の方言地図』中公新書

## <制作体制>

### ビデオ作品制作委員会

(○は委員長)

加藤 昌男 (財団法人NHK放送研修センター日本語センター  
エグゼクティブ・アナウンサー)

品田 雄吉 (映画評論家 多摩美術大学名誉教授)

田中 孝一 (文部科学省初等中等教育局教育課程課 教科調査官  
国立教育政策研究所 教育課程調査官)

八百板 真弓 (東京都立新宿山吹高等学校 教諭)

○杉戸 清樹 (国立国語研究所 日本語教育部門長)

近藤 二郎 (国立国語研究所 管理部長)

熊谷 智子 (国立国語研究所 研究開発部門第二領域 主任研究員)

宇佐美 洋 (国立国語研究所 日本語教育部門第一領域 研究員)

### 制作会社 東京シネ・ビデオ株式会社

制作 横川 元彦

プロデューサー 川尾 俊昭

脚本 大西 竹二郎

監督 富永 一

「ことばビデオ」シリーズ  
＜豊かな言語生活をめざして＞1 解説書  
相手を理解する  
言葉の背景を見つめると…

---

平成 14 年 3 月

編集・発行

独立行政法人 国立国語研究所

〒115-8620

東京都北区西が丘 3 丁目 9 番 14 号

電話 (03) 3900-3111 (代表)

FAX (03) 3906-3530 (代表)

ホームページ <http://www.kokken.go.jp>

印刷者

(株) 和幸印刷

新宿区西五軒町 7-10

電話 (03) 3235-1031 (代表)

